

十二月六日は理想的の飛行日和であつて、同じ襲撃が行はれた。之まで一月以上も襲撃を受けなかつたのは、全く天候の關係である。

十二月十八日のロンドン襲撃は不意打であつた

天候上ロンドン人は安心して居つたのである。一月二十八日のロンドン襲撃は、満月で天に一點の雲のなき夜に行はれた。

シカゴ大學に於ける歴史批判學について

文學士 松本彦次郎

アメリカ合衆國に於ける全史學界の趨勢を論ずることは極めて困難である。ハアバート大學のロイス教授が死んでから、アメリカの哲學はブラグマチズム化せずんばやまざる勢である。否アメリカ人の生活そのものが實用的である。又今度の戰爭から生るゝ悲劇と、國民主義の創立及びその發展に基く理想界の變遷についての豫想は、それと今史學界の關係とは間接的のものであるからし

て、こゝに論じようとはしない。アメリカの大學は劃一制度の下にあるものではないだけ、それだけ各大學に於ける學科の配當や選擇も極めて自由である。それであるから各大學一般に就て論ずる事は不可能である云うてよい。又従來外國の大學に就ての紹介は極めて概括的でもあり、拙象的でもあつた。又日本の留學生の多くは所々の大學に轉じつゝ、その長短所を比較し

ようとするに急であつて、各大學そのものゝ内容を主として紹介したものは極めて少なかつたのである。

シカゴ大學では史學科は社會學と相並んで、法律學及び政治經濟學の間に置かれてあるから、日本流に云へば文科よりも寧ろ法科に近いものである。アメリカ全體の學風としては一方には實驗を過重し、一方に實社會に於ける應用といふことを主眼としようとする弊があつて、思想の國民としてはアメリカ人はまだ若い國民であると云ふてよい。今史學科と他の學科との關係は、それが重大ではあるけれども、細かに論ずるいとまは無いのである。タフト教授が十九世紀思想史と題して政治學及び經濟學と關聯せしめて時代思想を論ずる如きは、哲學から哲學を生み出さしむる如き日本の學者とは異なる見地を示す一例である。タフツ氏の美術史研究室は古典學研究室と棟を同じうし

ブレステッドの埃及學は西洋宗教の淵源たるクリスト教の郷土猶太に就ての聖書に關する科學的發展的研究に密接の關係を有してをる。經濟史も經濟學者の小マアシャル及び史家トムソンの史家的見地からの經濟史の講義もあるので、一學科と他學科とのつなぎ合せは離れぬになつて居らぬのである。それ故に大學に於ける科目選擇の範圍が廣いと云ふよりも、各學科相互の關係を重要視せしむるものあるを感せしめらるゝのである。かういふことを論ずれば際限が無いから、今は自分の専攻した學科を中心として、大學院の一部分の組織と内容を紹介しよう。

史學研究法は史學科の置かれてある諸大學に於いては、皆その研究入門として講せられて居る。けれども此の研究法はやゝもすればたゞ研究の手法だけであつて、その研究法の眞に生かされることは歴史そのものゝ批判に立入らねば實現されぬ

のである。シカゴ大學のゼミナルでは此の批判學を最高のものとして、大學内部で極めて重要視してをる。學生の數は十一人で中に女が一人加はつてをつた。受持は新進の教授トムソン氏が之を擔當してゐる。氏は中世史專攻の教授であるけれども、氏の主張は、史學の研究は實際には中世史の研究から出立したもので、古代史では史料が比較的貧弱であり、又近世史では餘りに複雑した社會現象の綜合研究は困難を極むるものである、といふのである。又史料の基本たる古文書についても古文書學は中世を主とするものであるからといふ信念から出發して居るので、徒にラムブレヒトの時代區劃等に憧憬せずして、史實内容そのものゝ綜合批判を中心として居るのである。そして單に羅列式參考書としてはなく、實際に常に用ゐたのは左の數種であつた。

Revue de synthese Historique.

第四卷 雜纂 シカゴ大學に於ける歴史批判學について

G. P. Gooch: History and Historians in Nineteenth Century.
E. Fueter: Geschichte der Neueren Historiographie.
H. Robinson: New History.
E. Perinheim: Lehrbuch der Historischen Methode.

その方法は教授の講義と、教授から分けられた題目についての學生の研究報告と、其の討論とを主とした。學生に割當てたのはランケ、モンゼン、メートランド、テイニス、クーランジュ等で、その題について細かい參考書の與へられたことは勿論である。討論と云ふても史的研究の經驗淺い學生相手であるから、教授の説が中心となつたことも止むを得なかつた。歴史批判と云うても片端から片づけると云ふより、史學そのものゝ發展を主とした。そして古代史についても、その時代に存せし史家の著書そのものゝ内容と史的價值と同時に史料としての用法を論じ、ヘロドトス、ツキヂデス、キケロ、ブルータークなど、希臘、羅馬の時代に於ける人々とその社會的關係と、時を經る

第一號 九五(九五)

に隨つての變遷と新開拓とを論じ、更に近代史家の古代史研究法、ニイボア、モンゼン、マイヤーに至る徑路を論じて、一方にその時代の大家の作

を史料として客觀的に取扱ふ方法と、現代の研究との二様の立場からしたのであつた。たゞそのうちの一つの例として、羅馬史に就いていへば、ケ

ーザル、キケロを史家として論じ、彼等の政治的軍隊主義とその時代とに及び、古代希臘の市國家の自由と羅馬の共和政とに及び、ガリ戦争等についても彼等の實生活より直接批判を加へ、その表現法としての文體の問題に觸れ、バテルクルスをば史的逸話の集成とし、逸話の道德的生活上の價値を論じ、タキタスについては、その史的表潮と暗潮とに關する卓見を稱賛し、その名著 *Germania* に就ては物的條件と獨逸の慣習とを叙し、更に進んで新興獨逸の制度史と羅馬の最後の自由思想との關係の見らるべきことより、新獨逸國民のヘレ

ランケをば近世史家を生んだ一人として其の中世史研究と文書の利用法とその綜合的態度とを詳述し、外にランケの研究を生んだ英、佛、獨に於ける史家及びその系統を論じ、一研究が世界を動かした內的價值等に就てはふるひ立つほどの感激を學生に與へた。その系統を論ずる引合ひには英吉利のメートランドも屢々出され、先年物故した佛蘭西のモノーに至るまでに及んだ。そして近代史家の批判のみならず、それを生んだ背景を論じ、客觀的敘述法を論じて、冷靜とか公平とかいつて、その實はそれ自身偏つた概念から出發する如きものではなかつた。そして晩近史風の直接的徑路としての十八世紀の特徴として、合理主義と百科全書的精神とより世界主義を論じ、ゾー

ルテアをその代表的史家とし、其の思想の世界
的傳道方便としての佛蘭西語の性質に及ぼす等用
意周密なるものであつた。更に又合理主義の反動
として起つたロマン主義とルソーの思想との交渉
を述べ、政治社會上の自由主義については伊獨國
民の自覺とその國民主義勃興に至る徑路とを力説
し、此の國民主義を十九世紀の特色とし、その根
柢に横はる心理的傾向と政治的思想とに重きを置
き、新科學發展地としてベルリンを推し、ベルリ
ン大學の Hegel の内的價值を論じ、その自由主
義は國民的自覺と結合されたるものなることを洞
察し、此の新精神の生んだ科學的研究法をば、組
織的、科學的精神のものなりとし、ニイボールを
ば古代史研究の恩人としてのみならず、その Her
mann をば國民主義に攝取せる所なき、史家と

リン大學の運動の歐洲各地に及ぼせる影響はラン
ケの研究室に集注せしめて論じたる如きは、百科
全書的、博學派の羅列主義でないことを強く感ぜ
しめられた。人類活動の表現として、又人類の共
同生活より開展する史的事實として歴史を論じ、
感情に走ること勿れといふ如き常識論ではなく、
人間活動は情意的活動であるからして、エモーシ
ヨナリズムによつて始めて人間活動の眞髓を把握
し得るとし、精神主義も亦一理ある杯いふ暢氣の
研究法でもなく、又經濟的見地、心理的見地等の
分類法にも拘泥せない。たゞラムプレヒトの研究
法とその研究とに就ては、その價值は將來に於て
明にせらるべきものであると結論したのは、聊か
物足らぬ感じがあつて、ラムプレヒトに就ては善
意に解しすぎた嫌もあつた。

その時代とに就ての關係をも輕視せず、眞の史家
の時代精神の指導者たるべきことを暗示し、ベル
も、佛國に於ける史的潮流に就いても決して之を

輕視せず、英國系統ではフリーマン、メートランド等をも論じた。教授はアメリカ流の實際主義の人でないだけに、その講義も生き／＼として、悲劇を有たぬ國民は亡國の民であると論じたあたりは教授の思想の特色を示すものであつた。

佛蘭西の史家ではヴォールテア、ギイゾー、テエンに、デュルイよりラヴィスに至るまで漏る所がなかつたが、中にもクーランジュは天才的史家としてその研究法はランケの研究法と暗合せるものあることを論じ、トクヴィルをばクーランジュの新史學勃興前の過渡期の史家となし、モンゼンと比較して、後者の國家的であること、前者の黨派心等に全く囚はるゝことなく、その法制に關する見解は憲法や行政法等を獨立したものとし

て分類するを好まずして、國民信仰や社會關係からして國家的組織を説かうとしたので、こゝに綜合的研究の意義があることを詳論したのは極めて切實であつた。

講義の全體としては具體的事實の探究から綜合して、所謂抽象的歴史哲學に陥ることなく、近世史家の取扱つた史的内容そのものを批判し、一切の著作に對して價值批判を加へて論述したのであつた。そして研究法そのものは所謂方法ではなくして、歴史を組立つる徑路そのものに觸れ、時代精神に活躍する歴史的要素を分析する所は史實の選擇とその綜合とに就て大なる暗示を與ふるものがあつた。

施藥院

文學士 西田直二郎